

11月集会成功に向け総決起を

動労千葉が9月28日、定期大会を開催し、戦争情勢―JR再編攻撃に立ち向かい、組織拡大と11・3へ総決起する方針を確立しました。 関委員長のあいさつを紹介しします。



動労千葉が9月28日、定期大会を開催し、戦争情勢―JR再編攻撃に立ち向かい、組織拡大と11・3へ総決起する方針を確立しました。 関委員長のあいさつを紹介しします。

私たちは大きな歴史の分岐点に立っています。この1年、特に戦争への突進は重大な転換と具体的な軍事体制構築が進められています。

4月の日米首脳会談では、日米安保の「始まって以来、最も重要な刷新」と言われる歴史的な転換が宣言されました。日米の指揮・統制機能を一体化させることが確認され、ただちに自衛隊は陸海空を統合する作戦司令部が設置されました。7月には「核拡大抑止」が明示に確認され、

米軍も指令機能をハワイから東京の横田基地に移そうとしています。

米軍との一体化だけではありません。沖縄・南西諸島には自衛隊のミサイル部隊が続々と配備され、奄美大島、宮古島、石垣島、与那国島でその数は2400人にのぼります。

「中国が脅威だ」「台湾有事に備えよ」「2027年までに起り得る」「国を守れ」――危機と排外主義が煽られ、大軍拡と戦争国家化が正当化されています。しかし、その本質は帝国主義である米日の側からの中国に対する戦争です。

現実には戦争に突き進むものとしていくからこそ、あらゆるものを戦争につき込み、社会のあり方そのものを「戦争のため」に作り変える国家改造攻撃がかけられています。

この戦争国家化攻撃の中で、物価上昇も含めて、労働者には格差と貧困、生きられない現実が強制されています。「生産性を上げる」という

攻撃も、中小企業や地方を淘汰していく攻撃も、「すべての国力を戦争へ」という攻撃です。

労働組合は本来、団結と権利の拠り所であると同時に、反戦の砦でもあります。地域で、街頭で、職場で、自国政府の戦争政策と闘い、労働者同士が殺し合うのではなく国境を超えて団結し、絶対に戦争を阻止することを、労働組合の最も重要な任務としてこの大会で改めて確認したいと思えます。

11・3労働者集会へ

この情勢の中で、何よりも問われているのは労働運動の変革です。戦争に動員されるのが労働者なら、戦争を止める力があるのも労働者だからです。怒りの声は満ちています。ガザでの虐殺に怒り、何としても止めたよとの思いは高まっています。

この間の報道では自民党総裁選や立憲の代表選が大写しに報道され、「どの自民党総裁がましか」「自民か立憲か」が「唯一の選択肢」のように宣伝されています。自民党総裁選では全員が改憲を語り、「核共有」「核

11・3全国労働者総決起集会

11月3日(日) 正午 日比谷野外音楽堂
午後3時 改憲阻止! 1万人行進 (東京駅へデモ)

の持ち込み」という形で核武装が語られ、原発を推進し、裏金も居直っています。新総裁に選ばれた石破は「アジア版NATOが必要だ」ということまで言っています。

立憲の代表選でも全候補が日米同盟基軸です。要するに誰が改憲と戦争、労働者への攻撃を進められるかを競っているに過ぎません。ここに労働者の選択肢はありません。

この2年あまり、多くの仲間が11月集会結集に向けて無数の反戦デモや行動を組織してくれました。そして多くの可能性が切り開かれています。そこから、本当に戦争を阻止する力のある運動、安保・沖縄闘争、改憲・戦争阻止の闘いをつくりあげていかなければなりません。

そして、関生支部への歴史的な大弾圧、港合同に対する民事再生法による選別解雇、労組破壊の攻撃、そして、JRにおける「労組なき社会化」という形で3労組への攻撃がかけられています。これは全労働者にかけられた攻撃です。この労組解体攻撃を絶対に打ち破るために、11月集会の成功をかちとりましょう。

昨年の11月集会後から参加労組が次々にストライキにたちあがり、労働運動再生の展望も大きく切り開か

【裏面に続く】

れています。こうした前進をさらに発展させるものとしてかち取りたいと思います。

今年6千人結集という目標を目標に掲げています。動労千葉としても3桁の結集を訴えます。組合員の皆さんには、ぜひ周りの仲間、家族、友人も誘って、日比谷野外音楽堂に結集してほしいと思います。

JR資本が攻撃を主導

同時に、JRと対決している私たちの闘いの位置は改めて決定的です。戦争国家化や労働者への攻撃の先頭にJRが立っているからです。

ひとつは、地方ローカル線の全面的な廃線化という形で進められている国家改造攻撃です。焦点になっているのは久留里線です。検討会は「代替交通にしろ」という結論を年内にも出そうとしています。10月19日に亀山で集会が行われます。守る会の皆さん、地域の方々と連携しともに闘いにたちあがりましょう。

もう一つは、「40年に一度」と言われる労働法制の改悪です。その中身は、「社友会攻撃の全社化」というべきものです。

経団連が今年1月に出した提言は、一応は労働組合の存在が前提になっている労働法制のあり方を根本

から解体し、労基法も労働者の権利を守るものではなく、「生産性の改善・向上のためのものにしてしろ」というものです。

この経団連の労働法規委員会委員長はJR東日本前会長である富田です。そして、「新たな集団的労使関係」と称して進められようとしている攻撃のモデルは明らかにJR東の社友会です。攻撃の方向性は今年度中にも出されると言われ、一挙に法制化まで進められようとしています。

この中で、JR東の中でも、各支社ごとだった社友会の連携協議会というものがたちあげられ、社友会の組織体制を本格的に確立させようとしています。

信じがたい安全崩壊

JR体制は、信じがたい安全の崩壊に行き着いています。今年に入ってから、新幹線での架線事故に伴い再び感電事故が起り、新幹線が停車位置を520mもオーバーしたり、保守用車両が追突して脱線したりと重大事故が相次いでいます。

直近では東北新幹線で3000キ以上で走行中に列車が分離するという前代未聞の事故も起こっています。切りが端子と端子の間を介在して分離したと報道されています。しかも、

保守用車両の追突事故では、14年にもわたってブレーキの点検方法が間違っていたといっています。

貨物列車の脱線事故をきっかけに発覚した車輪と車軸の組立作業では、圧力超過や記録の改ざんが長年にわたって行われていた実態が告発されました。その後の各鉄道会社の調査で、貨物だけじゃなく、JR各社や私鉄を含めて鉄道会社全体にまん延していたことがようやく明らかになりました。

JR東日本は17年の時点の調査で約1200本の改ざんが発覚しているながら、完全に隠ぺいしていました。若年退職者は止まらず、安全崩壊や技術継承の破たんというだけで言い表せないほどの「鉄道崩壊」です。



攻撃の矛盾

安全の崩壊は、外注化の矛盾を完全に明らかにしています。

会社は新系列の機能保全(旧車両の交番検査)を含めて全面的な外注化と分社化・転籍攻撃にカジを切るようとしています。船橋統括センターの新設ですべての駅と運輸区が統括センター化され、業務融合化がさらに進められようとしています。

船橋統括センターにおいては、西船橋に乗務ユニットという「運輸区」ができる。ここには12月1日からの運用に向けて、支社を超えて70名の配転がされようとしています。

鉄道は様々な技術分野があり、それぞれの技術力を持った労働者を養成することは、鉄道会社の根幹にあたる部分です。その各系統の技術力養成を放棄すれば、安全が崩壊するのは当然です。その出発になったのは外注化攻撃です。そして、職名廃止・融合化攻撃は、これを完全に放棄していくと宣言するものです。

職場では激しい攻撃が吹き荒れています。しかし、安全の崩壊や若年退職者の激増という形で攻撃の矛盾が吹き出しています。今年のダイ改では京葉線をめぐって、発表後に修正するという、これも前代未聞の事

態に追い込まれました。沿線住民や地域から激しい怒りの声が上がったからです。みどりの窓口も廃止方針を凍結し、一部では復活せざるを得なくなっています。

動労千葉の闘い

職場における職名廃止・融合化も、外注化攻撃も、矛盾に満ちています。攻撃を打ち破る可能性は生まれています。そして闘いの力ギは闘う労働組合です。実際、会社が融合化を開始したのは、東労組解体に踏み出したからでした。あの御用組合でも潰さなければいけないほど、職場の団結を会社が恐れているのです。

「団結さえ崩さなければ、展望は必ず切り開ける」――これは動労千葉が闘いの中でつかみとってきた教訓です。現在のそのような情勢だからこそ、国鉄分割・民営化と対決し抜き、外注化攻撃にも組織を挙げて全力で阻止してきた私たち動労千葉が果たすべき役割があります。

会社に対する最大の反撃は、動労千葉の組織拡大です。本格的な組織拡大の展望も、「1人」を獲得するところから生まれます。そのために、「今こそ声を上げよう」「動労千葉に入ってもに闘おう」と職場の仲間